

令和2年5月29日

●上から目線な言葉!?「地球に優しくしましょう」

～感染症と環境問題～

「ポストパンデミック(コロナ)」について考えてみる その3

①ある雑誌(『暮らしの手帖』)のインタビュー記事の言葉。中村桂子さんという生物学者が言う上記の言葉にドキリとしました。

②「今の社会が求めていることは、手がかからず、思い通りに、早く。でも、本来生き物はその真反対。手がかかるからこそ愛おしい、生きることに『早い』は合わないの。」と続きます。

③中村さんは、「生命誌」という研究分野を50歳のときに生み出しました。「生命誌」とは、生物の進化、生態系を生命の源「細胞」から紐解く研究だそうです。

④「生命の歴史をさかのぼれば、38億年前、ひとつの先祖(細胞)に到る。人間は自然界に存在するたくさんの生き物の中のひとつでしかない。海から陸へと進出し、進化した生命の歴史を絵で描くと、ヒトは、隅っこの隅っこにようやくみつけることができる。

『地球に優しくしましょう』。それって上から目線よね。…」と記事

にはありました。

⑤2月の「課題研究発表会」で講師の先生に厳しく指摘された点も同じでした。種子島や屋久島の将来について、私たちは、種子島や屋久島以外の、所謂「都会」で便利で快適に生活する者として、「何かを考えてあげる」という姿勢ではないのか…と指摘を受けましたね。

⑥自分たちは何者なのか、誰の視点に立って考えるのかなどと突きつけられると、途端に口ごもってしまう。どんなに自由を気取っても、知らず知らずのうちに「一定の思考の枠組み」の中で考え生きていることが^{あら}露わになってしまいます。

⑦「地球に優しい」というスローガン・言葉が、私たちの思考の枠組みをいつの間にか規定していきます。言葉を疑うことによって、この話題のように、ヒトの奢りのようなものに気付くこともあります。

⑧中村さんは「スマホの画面に出てくる情報は、すでにわかっていることだけよ。」とも述べています。やはり、ドキリとします。

⑨ドキリとすることは少し、しんどいことです。できれば穏やかに生活したいものです。それでも、時にドキリとし、「揺さぶられる」ことを恐れず常に考えよ…と、ポストコロナの世界は求めています。